



医学部だより

第37号

2018.10.1



医学部の近況

医学部長 丹 黒 章

2010年の米国 Educational Commission for Foreign Medical Graduates (ECFMG) による「2023年以降、国際基準に基づいて認定された医学部の出身者でなければ ECFMG 受験資格を与えない」との通告を受けて、2011年全国医学部長病院長会議は、「医学教育の質保証検討委員会」を発足させ、2015年には国内の全医学部が正会員となって一般社団法人日本医学教育評価機構 (JACME) が発足しました。徳島大学医学部医学科も2014年に「医学教育分野別評価準備委員会」を設置し、2016年からは各分野別ワーキング・グループを結成し、グローバルな視点に立って、より高い教育レベルを目指して、自らの教育を客観的に評価しつつ、問題点を議論してきました。JACMEも2017年に WHO の関連機関である、医学教育 NGO 世界医学教育連盟 (World Federation for Medical Education: WFME) から国際評価機関としての認証を受けました。WFME 認証後、16校が受審し、13校が国際認証を受けています。本校も赤池副医学部長を中心に、各作業部会の先生方の献身的な努力で、やっと報告書提出を終えたところです。エリア担当の先生方、カリキュラム関係の委員として参画された学生諸君に心から感謝いたします。この原稿が皆さんの手元に届いているところは、ここ数年來の懸案事項であった医学教育分野別認証審査が終わっていることと思います。

徳島大学医学部は、幕末から明治時代の蘭方医であった関寛斎先生の功績によって設立された徳島藩立医学校 (明治3年) の設立にその源流をたどることができます。その藩校が明治5年に廃校となった後も、多くの関係者の努力により徳島県立医学校 (明治13年～明治19年) が開校されましたが、この医学校も自主的経営が困難と判断され廃校となりました。四国における医育機関の無い時代が長く続いた後、太平洋戦争の開戦により、医師の需要が増し、昭和18年に県立徳島医学専門学校が開

校されました。初代校長に大阪大学医学部教授の中田篤郎先生が就任されました。昭和20年4月には官立に移管され、徳島医学専門学校となりましたが、7月4日の空襲により附属病院とともに一夜にして灰塵と化し、廃校の危機を迎えました。中田篤郎校長をはじめ教職員、学生、県の熱意により、昭和21年に陸軍病院のある蔵本町の兵舎跡に移転しました。昭和23年2月には徳島医科大学に昇格となり、中田篤郎先生が学長に就任され、昭和24年5月に国立学校設置法により四国唯一の国立大学医学部となったのです。附属図書館蔵本分館の前庭には、中田篤郎先生の碑「学者如登山」が刻まれています。また、教授会が開催されている第1会議室の壁にも「学者如登山」の揮毫が架けられています。これは、学べば学ぶほど登山のように見晴らしがよくなる、すなわち学習により、より視野と見識が広がっていくことを意味する言葉で、徳島大学医学部教育の基本的姿勢を示しています。学習、研究することで未知の知見を発見できるだけでなく未見の我に出会えるのです。

徳島大学医学部は、設立当初より地域からの要望に応え、四国地区の地域医療を支える人材育成だけでなく、高度な医療と医学研究を実践してきました。2019年から医学科では、地域の研究者育成を目指して、四国4県から各2名の研究者育成を目指した AO 入試を開始します。医科栄養学科は、宇宙航空研究開発機構 (JAXA) と連携して研究を続けてきましたが、新たに宇宙栄養・食糧学の研究開発拠点の発展を目指した「大学院医歯薬学研究所宇宙食品産業・栄養学研究センター」を設置しました。保健学科も国際的にも通用する教育を目指して、International Nursing Basic Course を開講し、フロリダアトランティック大学 (米国)、メトロポリア応用科学大学 (フィンランド)、セントポール大学フィリピン (フィリピン) との連携による語学研修プログラムを継続して推進しています。

目次

CONTENTS

巻頭言	1	各賞受賞者	9
海外留学体験記	2	平成30年度臨床実習後OSCE成績優秀者	10
リサーチマインド育成システム Student Lab (スチューデント・ラボ) の新たな展開	4	第70回西日本医科学生総合体育大会	10
第3回宇宙開発利用大賞 (文部科学大臣賞) 受賞について	5	医学部行事予定	10
保健学科・保健科学教育部のがんプロへの取り組み	6	学遊抄	11
オープンキャンパス	7	数字で見る医学部	13
学生委員会から	8	新任教職員ご挨拶	14
教務委員会から	8	退職者ご挨拶	14
徳島医学会報告	9	編集後記	14

海外留学体験記

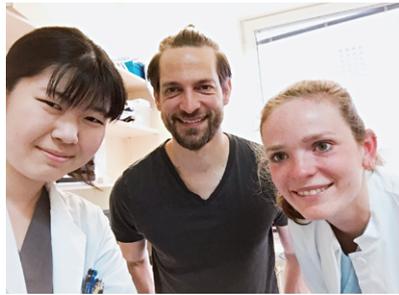


ハノーバー医科大学 選択実習Ⅱ

報告

医学科6年 小玉美幸

今年の5月、ハノーバー医科大学の神経内科に1ヶ月間留学させていただきました。担当患者さんの問診・診察を英語で行ったり、患者さんの処



置を見学させていただいたりしたうえ、先生方と疾患についてディスカッションも行いました。先生方は皆さん優しく、回診等でドイツ語が分からなくても質問すると丁寧に教えてくださいました。ドイツでは医師と患者さんがとても長い間話している印象を受け、患者さんが何でも医師に相談しやすい信頼関係が出来上がっているように感じました。また、他国からの留学生とも実習や寮で仲良くなることができ、各国の医療事情や文化の違いを知ることができました。休日には新しくできた友人と小旅行をしたり、街にショッピングに行ったりして過ごし、異国の地を存分に満喫できました。このような貴重な機会をくださった臨床神経科学の野寺先生をはじめ、お世話になった皆様に心より御礼申し上げます。



セントポール大学フィリピン 選択実習Ⅱ

報告

医学科6年 川村 晨

5月の1ヶ月間、フィリピンのセントポール大学へ学外実習に行ってきました。総合内科、救急外来を中心に実習を行いました。医療機器は日本と比べると十分だとは言え難い環境でしたが、それを補う丁寧な病歴聴取や身体診察に現地の医師は自信を持っていました。また、フィリピンの医学教育は英語なので学生はハリソン内科学をはじめ世界基準の教科書で勉強していることや、週二回病院に泊まり込みでの救急外来実習が義務付けられていることから、決して医学知識が遅れている印象はありませんし



た。むしろ実践的な面だと日本は負けていると焦りを感じたのと同時に、この経験を糧に今後も努力を続けていこうと強く思いました。このような素晴らしい機会を与えてくださった関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。



セントポール大学フィリピン 選択実習Ⅱ

報告

医学科6年 高 磯 甫 隆

私は5月にフィリピンの St. Paul's hospital で1ヵ月の臨床実習をさせていただきました。この実習で一番驚いたことは、同い年の現地の同級生たちが、医療の第一線で活躍していたことです。彼らは、救急外来で最初に患者さんを診察するほか、医療保険に加入していない患者さんたちの外来も担当し、さらには365日間、3日に1度の当直を行いながら、土日関係なく無休で



実習していました。医療スタッフの重要な一員として診療に携わっている姿は非常に印象的で、大きな刺激を受け、彼らに負けないようこれからも精進したいと強く感じました。

このような機会を与えてくださった関係者の皆様、お世話になったフィリピンの皆様に心より感謝申し上げます。





ソウル国立大学 交換留学プログラム

報告

医学科6年 藪野 淳也

2018年5月7日から6月16日までの6週間、韓国のソウル国立大学病院（SNUH）の Department of Radiation Oncology と Department of Family Medicine にて選択実習を行いました。韓国トップクラスの医療を経験できただけでなく、現地の学生と一緒に実習をさせていただき、韓国の医療のいろいろな側面を見ることができました。韓国の医師や学生とお互いの国の医療や教育のことについて議論するのは非常に刺激的であり、また東南アジアからの留学生も多く、様々な人々と交流することができました。医学・医療以外にもたくさんのことを学ぶことができたので、この留学期間は本当に貴重な体験となりました。このような機会を与えてくださった諸先生方、そして関係者の皆様には厚く御礼申し上げます。



トリブバン大学 診療参加型臨床実習

報告

医学科6年 別所 良祐

平成30年4月にネパール連邦民主共和国の Tribhuvan University Teaching Hospital (TUTH) にて、一週間眼科実習をさせていただきました。

Teaching Hospital は医療・教育の質ともに高く、自分より学年が下の学生が治療や検査を行う姿に危機感を感じずにはいられませんでした。また、診療の共通言語は英語であり、英語を理解することの重要性を再認識することができました。

今回の実習で得た経験を活かして



これから先、更に努力をしていこうと思います。最後にこのような機会を提供して下さった眼科学教室の三田村先生、国際センターの内藤先生をはじめ関係者の皆様には厚く御礼申し上げます。



ハノーバー医科大学 選択実習Ⅱ

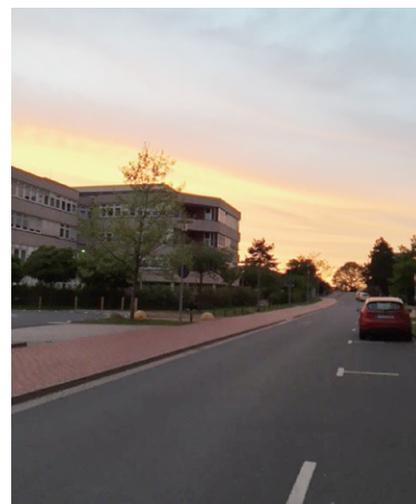
報告

医学科6年 中村 真由子

今年度5月に選択実習という形で、ハノーバー医科大学（MHH）の神経内科にて実習をさせていただきました。神経自己免疫性疾患をおもに扱うステーションにおいて、MSやGBS、SMA、ALS、CIDP、抗NMDA受容体抗体脳炎などたくさんの症例を実際に目にし、その診断の仕方や治療（ステロイド、IVIG、リツキシマブ、血漿交換、エダラボン（ALS）、ヌシネルセン（SMA2）、フマル酸ジメチル・ナタリズマブ（MS）等）について学びました。ここで得られた経験や考え方を生活に反映させて今後を過ごします。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった神経内科の梶先生、野寺先生に心からお礼申し上げます。また、様々な面で支えてくれた両親と友人たちに感謝します。そして、医学部長の丹黒先生、MHHでお世話になりました。

Dr.Petri, Dr.Süh, Dr.Marina, Mrs. Bettina, Ms.Reem を含む全ての方々に深くお礼申し上げます。ありがとうございました。



リサーチマインド育成システム Student Lab (スチューデント・ラボ) の新たな展開 ～Jr. (ジュニア) Student LabとSr. (シニア) Student Lab～

統合生理学分野 教授
Student Labコーディネーター 勢井 宏義

徳島大学医学部には、学生のリサーチマインド育成を目的とした Student Lab という仕組みがある（医学部だより35号5ページ）。Student Lab はバーチャルな研究室で、学生の夢や好奇心が集まるところである。学生は何年生であっても、Student Lab を介して興味ある分野（1教授が管理する研究室の単位）に所属し研究を体験・実践できる。医学科3年生は、正課科目「医学研究実習」においてマッチングで決めた分野に8か月間配属するが、その際も、全員 Student Lab の一員としてその分野に派遣され、指導を受けるという形になっている。

最近、学習の目標を問うと「教えられたことはキチンと憶えます」という医学生が多い。この受動的な学習意識は、今、医学教育が抱える大きな問題点のひとつである。リサーチマインドを支える自主性や好奇心が豊かな学生は、受験勉強で抑えてきたものを Student Lab をきっかけに大きく羽ばたかせているが、はて、どれだけの学生に効果があるのか、今後はその教育効果を詳細に検証しなければいけない。

一方、入学前の、まだ発展段階にある高校生に Student Lab を開放し、リサーチマインドの原石を見つけ、高校と大学が連携して大切に育成していくのも有効ではないだろうか。今年度、医学部は新たに Jr. Student Lab を設置した。希望する高校生の中から原石候補を選考し、Jr. Student Lab を介して医学研究実習に組み込み、研究を実践的に体験してもらう仕組みである。大学での身分は、公開講座受講生であり、授業料が若干発生する。高校生が徳島大学の科目を受講できる仕組みは、すでに平成16年に県教育委員会との協定が結ばれていて、徳島大学は高校生が受講可能な講義リストを用意している。31年度より、そのリストに医学研究実習（一部）が加わることになる。

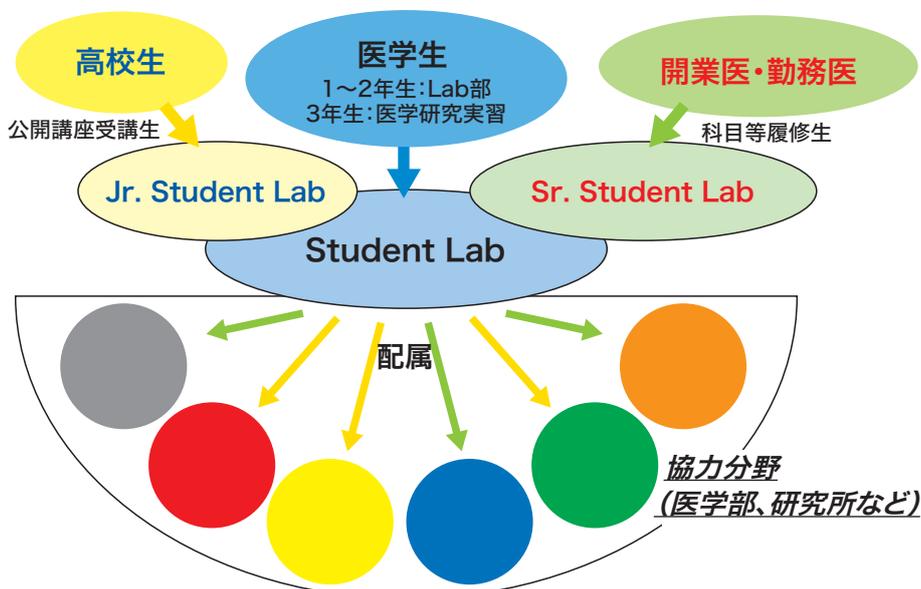
高校生は、1か月あまり先行して配属している医学科3年生に指導を仰ぎ、協働して実験に取り組む。医学科生にとっては、習ったことを高校生に教えることで学習効果を大きくでき、また、高校生を指導・評価することによって、自らを振り返る機会になると期待している。今年度は試行的に、これまで高大連携の実績がある徳島市立高校から、2年生4名および3年生5名が協力分野に配属している。この文章を執筆している6月に、中間ヒアリングを行い、高

校生の様子を見た。ラボノートの記載内容が医学科生を超える生徒や、逆に研究よりも入試への意識が先行する生徒など、医学科生に比べ多種多様であったが、素直な高校生と対峙して、Jr. Student Lab の取り組みは充分意義があると手応えを感じている。どちらかという、医学科生の中に高校生の指導を避ける学生が多いことが分かり、「教えられたことはキチンと憶えます」という学生の言葉をあらためて苦くかみしめている。

医療人には生涯学習も重要である。常に新しい情報を自ら入手し、医療活動の質を維持しなければいけない。そこで、Jr. Student Lab の設置に合わせ、Sr. Student Lab も同時に設置した。この仕組みは、すでに、医学博士を有している医師（開業医や勤務医など）に、医学研究の知識や手技を update していただくためのものである。大学の身分としては、科目等履修生であり、検定料、入学料、授業料が発生する。医学科生と一緒に、マッチした分野に配属し、リサーチマインドのリフレッシュに役立てていただきたい。一方、医学科生は、研究室での時間をともに過ごすことで、様々な医療現場で活躍する先輩たちとのつながりを持ち、得られた知識や情報を自分のキャリアプランに生かすことが期待される。今後、県内外の医師会などで広報活動を進めていきたい。

Jr. および Sr. Student Lab の設置で、高大連携や生涯教育などの社会貢献に努めながら、医学部の教育研究活動がより活性化し、その活気溢れる空気の中で、学生の学習活動も自ずと活性化することを期待している。

3つのStudent Lab



第3回宇宙開発利用大賞(文部科学大臣賞)受賞について

生体栄養学分野 教授 二川 健

今回は、本当に望外の賞を受賞することができました。これも一重に私の研究を支えていただいた方々のお陰だと感謝いたしております。私のような者でも受賞できたのですから、今後も若い研究者に続いて欲しいと思います。そのような訳で、今回は、申請から受賞に至るまでの(小さな)ドラマをエッセイ風に記載します。若い研究者が、それなら自分もできると思っていたら幸いです。

それは、平成29年11月30日の生物資源産業学部事務課長 松江さんからの一通のメールから始まった。第3回「宇宙開発利用大賞」の公募について、応募期限が12月11日まで延長するので、申請してみてもどうかという内容であった。そんな賞があることすら知らなかったのだが、その当時は採択されるなどは露ほども思っていなかった。「それでは、出すだけ出してみます。」と軽い気持ちで、松江さんに返信したのだった。その当手を振り返ってみると、12月5-6日に東京で筋ジストロフィー研究武田班の班会議が、7-9日に神戸で日本分子生物学会とかなりタイトなスケジュールであった。班会議では、急いで班長の武田伸一先生に推薦書の執筆をお願いした。神戸では、自分の発表以外はほとんどホテルに閉じこもり、申請書作成に専念し、締切りの前日10日(自分の誕生日です)によりやく提出できたのだった。

思えば、人生の岐路に立たされたときは、必ずと言っていいほど、周りの先生や友人からのサポートがあった。大学受験に失敗し、医学部に行くか教育学部に行くか迷ったときや、臨床医になるか基礎研究者になるか迷ったときなどである。今回も、そうであった。松江さんからのメールがなければ、武田先生が推薦してくれなければと考えると、「日頃の間人間関係が如何に大事であるか!!」ということに再認識した。武田先生は、私のライフワークである「骨格筋研究」に自分を導いてくれた大恩人であり、このような先生と巡りあった幸運に感謝している。真面目に努力していれば、必ず周りにこのような人がいるはずなので、若い研究者の皆様も諦めずに頑張ってください。

さて、話を本筋に戻す。「宇宙開発利用大賞」は、日本の宇宙開発に貢献した個人や団体を2年間に一度表彰するものである。過去の受賞者をみると、やはり、純粋な研究よりも応用、開発に重点をおいた研究テーマが数多く受賞されていた。私の今の研究テーマは、「無重力による筋萎縮のメカニズム解明とその栄養学的治療法の開発」であったので、基礎的な筋萎縮のメカニズムの解明ではなく、応用研究である栄養学的治療法の開発を中心に申請書を仕上げた。疾患に有効な機能性食材の開発は、医科栄養学科の最も得意とする分野のひとつであるので、今回の受賞は医科栄養学科を代表して受賞したものと自覚している。

受賞日は3月20日と決まっていたが、3月に入っても受賞の連絡は来なかった。募集要項に、受賞者のみ連絡と記載されていたので、やはり駄目だったかと思っていたところ、3月4日午後15時に生体栄養学の事務室に「文部科学大臣賞受賞おめでとうございます。」との一報が入ったのであった。それから後は、正直夢心地であった(浮かれてしまい申し訳ないです)。受賞当日、これまでは一度も参加されなかった安倍総理大臣も列席の中、林文部科学大臣より直接表彰状と盾を授与された(写真1)。受賞後、短いコメントを求められたので、「私の所属する徳島大学医学部医科栄養学科は、医学を基盤とした管理栄養士を養成する唯一の国立大学です。……」(実際は、少し

かんだのです(が)と言ったとき、横にいた林文部科学大臣や観客から「ほーっ」という声が上がったのだ。このとき、「徳島大学医学部医科栄養学科は、国内唯一の医学部にある管理栄養士養成校として独自の教育と研究を行っ



(写真1) 平成30年3月20日
第3回宇宙開発利用大賞授賞式

ている。」ことが認知されたのではないかと感じた。そして、このときほど医科栄養学科で研究ができて良かったと思ったときはなかった。実際、医科栄養学科の科学研究費の採択率は約7割である(徳島大学の全体の採択率はおおよそ3割である)。一人で複数申請しているため、全教員がほぼ一つの科研を採択されているのだ。このような教育・研究施設は、徳島大学内でも、いや全国でもそうないと思う。

この受賞のお陰で、平行して進めていた、宇宙植物工場を開発することを主目的とした宇宙食品産業・栄養学研究センター(通称、宇宙栄養研究センター)も大学本部で認可され、無事8月1日に正式に発足する運びとなった(詳細は、研究部だより第8号を参照してください)。また、研究室の卒業生を中心に盛大な祝賀会も開催してもらいました(写真2)。私の人生のクライマックスだと思います。本当にありがとうございました。

私の任期もあと8年余りです。お世話になった先生方、学生諸君に感謝しつつ、教育と研究をもう一段ステップアップできるようにさらに努力をするつもりです。今後ともよろしくお願いいたします。と本来ですと、ここで筆を置きたかったのですが、今後導入されるかもしれないポイント制について、一言申させていただきます。もし原案のまま実施されますと、医科栄養学科では毎年1ポイント(教授1名分)減だそうです。医科栄養学科は8名の教授しかいませんので、医科栄養学科も10年以内に潰れてしまいます。前述のように、「山椒は小粒でピリリと辛い」的な小さくも特徴ある医科栄養学科を潰さないで欲しいです。何卒皆様の温かいご支援とご協力をお願い申し上げます。



(写真2) 平成30年5月12日
宇宙開発利用大賞受賞祝賀会

保健学科・保健科学教育部のがんプロへの取り組み

～医学物理学コースについて～

医用画像情報科学分野 教授 芳賀 昭弘
 医用画像解析学分野 教授 上野 淳二

『がんプロ』は“がんのプロフェッショナル（専門家）を養成する基盤形成計画”の通称です。がん対策基本法が制定された2007年にスタートした文部科学省のプロジェクトであり、現在第3期（2017～2020年）を迎えています。徳島大学は、「中国・四国広域がんプロ養成プログラム」に第1期から参画しており、愛媛大学、岡山大学、香川大学、川崎医科大学、高知大学、高知県立大学、徳島文理大学、広島大学、山口大学及び中国・四国のがん診療連携拠点病院と連携しながら、がんプロフェッショナルの育成を進めてきました。

保健学科・保健科学教育部のがんプロへの取り組みとして、本稿では医学物理士の育成について紹介したいと思います。医学物理士とは、放射線医学における物理的及び技術的課題の解決に先導的な役割を担う医療職であり、医学物理士認定機構（<http://www.jbmp.org/>）が実施する医学物理士認定試験と認定審査に合格することで得られる資格です。臨床では、放射線管理・運用などの放射線関連業務や装置の品質管理と品質保証や理工学的視点に基づく将来設計（マネジメント）等を行います。また医療スタッフへの教育、医学物理学の独自の研究や他の医療スタッフと協力した臨床研究などを行います（図1）。

医学物理士の役割

- 放射性同位元素・放射線発生装置の管理・運用
- 放射線治療計画の立案
- 放射線治療の品質管理・品質保証・マネジメント
- 緊急時の医学物理的観点からの対応
- 医学物理研究の推進／臨床研究のサポート
- 他職種への教育／マニュアル・資料の作成・整理

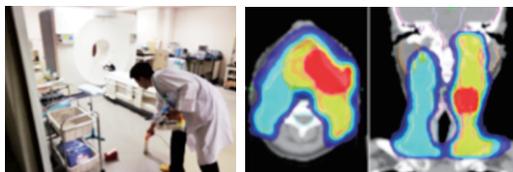


図1 医学物理士の役割

長足の技術革新によって、昨今、高度化・専門化した医療を支え、多様なニーズに対応できる医学物理士が臨床の現場で望まれています。徳島大学大学院保健科学教育部では、現在、医学物理学コースを開設しており、特にここ数年は合格率が30%ほどしかない医学物理士試験において、複数の人材の輩出実績があります。また、大学院生による論文発表も多数あり、これらの点はがんプロの外部評価において高く評価されています。本コースは現在、2019年度入学生から医学物理士認定機構の教

育コース認定を受けられるよう、申請準備とカリキュラムの整備を行っているところです。医学物理士認定機構の定めるカリキュラムに近づけることで、物理学・化学・生物学などの自然科学と医学・医療を結びつけた先端研究を推進し、医学物理士としての素養を磨くとともに、臨床現場における課題解決能力を身に付けられるような大学院教育を行なっていく予定です。

大学院教育とともに大学教員自身や大学病院で働く医師や医学物理士、診療放射線技師らの資質開発（FD）も中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアムの重要な活動内容のひとつとなっています。各大学で講習会を開催し、大学教員や医療従事者に最先端医療を学ぶ機会を提供することや、コンソーシアムメンバー各大学において指導的立場にある医師・看護師・診療放射線技師などを国内外先進施設に派遣して研修を行なっています。研修では、先進施設の手法を学んだ研修者をコアのチューターとし、コンソーシアム共通のFDを行うことで教育目標・教育内容・教育方法などの改善、向上、統一化を図っています。医学物理学コースでは、昨年度に3回の講習会を企画・実施するとともにアメリカの放射線治療施設に4名の研修者を派遣しています。今年度以降にも、第3期がんプロの柱の1つでもあるゲノム医療に医用画像を融合した新しい医療法の研修や、そのような先端医療で重要性が増している人工知能の研修などにも力を入れていく予定です。



図2 海外研修や講習会の風景

オープン

Open Campus

キャンパス

医学科

8月6日(月)の午後に、医学科オープンキャンパスが大塚講堂で開催されました。四国、近畿圏の方々を中心に474名(生徒278名、保護者196名)にご参加いただきました。丹黒章医学部長、赤池雅史医学科長のご挨拶の後、医学科の概要説明(野間口(医学部入試委員長)、MD-PhDコースの説明(石澤有紀講師 薬理学分野)、ミニ講義(基礎)「体内時計はあるのか?」(勢井宏義教授 統合生理学分野)、ミニ講義(臨床)「脳神経外科入門」(高木康志教授 脳神経外科学分野)が行われました。その後、生徒の方には医学科の研究室を中心とした施設見学、保護者の方には総合教育センターアドミッション部門の植野美彦部門長による医学科入試制度の説明に参加いただきました。ミニ講義は特に好評で、多くの方が大学での講義や研究に興味を持たれておりました。

今年度より医学科ではAO入試「四国定着研究医型」を開始します。そのため、「研究」・「研究医」とはどういうものか、

大学院への進学の意義について主に説明させていただきました。施設見学を通じて、徳島大学の研究環境や施設の充実度を体験していただいたことで、多様性のある研究内容や研究と臨床との両立について良い印象を持たれた参加者が多かったように感じております。これをきっかけとして、将来の徳島大学や四国の医学研究・医療を担う人材が医学部医学科に入学されることを期待しております。

(医学部入試委員長(微生物病原学分野 教授) 野間口雅子)



医科栄養学

台風の接近が心配されたなか、予定どおり8月8日に無事に医科栄養学科のオープンキャンパスが開催されました。全国から455名(高校生271名、同伴者184名)に上る参加があり、順延開催された昨年度より100名以上も多い人数となりました。高橋章学科長のご挨拶、医科栄養学科の紹介、2019年度入学者選抜の概要と医科栄養学科卒業生の就職状況の説明(二川(医学部入試委員)、ミニ講義「管理栄養士の未来～「栄養と食」の専門職として～」(鈴木佳子助教(疾患治療栄養学分野))が行われました。ミニ講義終了後は、高校生は大学内の医科栄養学科棟を中心とした施設案内と大学

生や学部生による各分野の紹介を、ご父兄の皆様には総合教育センターアドミッション部門の植野美彦部門長により詳細



な入試説明を行っていただきました。参加した高校生や父兄の皆様から多くの質問が出され、活発な質疑応答が行われました。

「2018年問題」と言われているように、これから18歳人口がもの凄い勢いで減っていきます。一説によると、すべての国公立大学の定員がおおよそ11万人であるにもかかわらず、今後10年間で約17万人減るそうです。医科栄養学科も2018年度の後期入試で10名の定員に対し、5名の受験者しかいないということを経験しました。私が医科栄養学科に勤務して以来初めてとなる追加合格者をださなければならないという事態となり、志願者の減少の恐怖をまざまざと感じました。それゆえ、医科栄養学科はこれまでの実績にあぐらをかくことなく、高校生やご父兄の方々にわかりやすく、かつ、丁寧に説明していかなければならないと肝に銘じてきました。

そのような気持ちで今回のオープンキャンパスを準備しましたが、終わった後のアンケートを読むと、「よくわかった。とても面白いオープンキャンパスだった。」という意見が多かったので、少し安堵しました。しかしながら、「難しかった。後期の募集人数が減ることにショックを受けた。」という感想もある程度の割合で見られました。2年後の2021年度入試からは、入試試験制度が大きく変わります。以上のようなデータを詳しく分析し、医科栄養学科への志願者が増えるように教育や広報に力をいれていきたいと思えます。

(医学部入試委員(生体栄養学分野 教授) 二川 健)

保健学科

保健学科のオープンキャンパスは8月7日の午後に開催され、北は茨城県から南は沖縄県まで、県外からも多くの方が参加してくださいました。参加学生数は看護学専攻205人、放射線技術科学専攻102人、検査技術科学専攻63人でした。大塚講堂での保健学科長・保健学科入試委員長による学科紹介・入試概要説明の後、専攻にわかれて説明会・相談会を行いました。厳しい暑さの中でしたが、参加者の皆さんは非常に熱心に聴講や見学をされていましたし、積極的に質問をする学生や保護者の方もいらっしゃいました。「体験実習」・「病院見学」・「施設見学」では、「医療系大学で学ぶこと」をリアルに体験していただけるよう、専攻ごとに工夫を凝らしました。また講演やDVDにより、看護師・保健師・助産師・養護教諭・診療放射線技師・臨床検査技師の具体的な業務内容や医療の中で果たしている役割を説明しました。医療人として働くことの意味を理解することで、漠然としていた自分の将来像が明確に

なり、目指す進路の決定を後押しできたように感じます。アンケート結果では、良い印象を持っていただいた方が多く、特に体験実習や施設見学が好評でした。今回も6月20日の募集開始後、すぐに定員がいっぱいになりましたので、参加できなかった方も多いと思えます。今後定員を増やすことや体験実習・施設見学枠の拡大を検討し、さらに充実したオープンキャンパスにしていきたいと思えます。

(医学部入試委員(放射線治療学分野 教授) 生島仁史)



学生委員会から

医学部学生委員会は、10名の教授の委員から成り、医学部の基礎系から3名（鶴尾吉宏、富田江一、米村重信）、臨床系から2名（西良浩一、廣瀬隼）、医科栄養学科から2名（阪上浩、酒井徹）、保健学科から3名（奥田紀久子、森田明典、香川典子）の委員で構成されています。本年度は、委員長は鶴尾吉宏が、副委員長は奥田紀久子先生が担当しています。この組織は、医学部と大学院における学生生活に関わる諸事項を審議し、学生生活の支援を行っています。学生の修学指導はもちろん、学内外での課外活動を監督し、奨学金貸与の選考や、表彰や懲戒に関するこの他に、身分異動、福利厚生、健康・保険や安全に関すること、進路、就職や留学、国際交流に関することなど学生生活に関係する多数の内容を扱っています。

この委員会の役割は、医学部の学生が上記の諸項目において安全で快適な学生生活を送れるように支援することです。但し、学生の非違行為が認められた場合には学生委員会が事情聴取などを行い、学長に報告し、全学の学生委員会で処分の量定を行うことがあり、懲戒などの厳しい判断が必要となる事例もあります。学生生活において休学願や復学願の提出を必要とする場合には、その都度相談等に当たっています。また、学生証を紛失して再発行の依頼を受けることが時にありますが、学生証は身分証明書であると

医学部学生委員長
（顕微解剖学分野 教授） 鶴尾吉宏

同時に、学内のセキュリティ情報が入力されていることから、医学科の5年次からの臨床実習での病棟への出入りの際などに必須です。紛失後に速やかな届けがない場合には、再発行できない事態も生じますので、学生証の管理には十分な注意を払うようにお願いします。

通学には自転車がよく利用されていますが、自転車の駐輪について、蔵本構内の指定された場所に必ずしもきちんと駐輪されていません。特に、体育館前と隣のテニスコート前、および図書館の周囲における通路での駐輪が目につきます。通路上での駐輪によって歩行者が通行できず、二次的な交通事故が起こる危険性があります。駐輪場所に関する正確な情報をお伝えしますので、社会的なマナーを守るようにお願いします。大学内はもとより学外においても、医療関係者として将来社会で仕事をする使命を受けていることを常に自覚して、正しい倫理観と道徳心を持って行動するように心がけてください。

学生生活は自主・自立が基本であり、学生には自己責任が問われます。しかし、学生生活で困った際には、学生委員会の先生方や学務課の学生係の担当者が相談に応じます。良い解決策が見つかるように協力しますので、気軽に連絡してください。

教務委員会から

医学部教務委員長
（法医学分野 教授） 西村明儒

今年度、医学科は、分野別評価を受ける予定で準備を進めている。これは、WFME（World Federation for Medical Education、世界医学教育連盟）に認証されたJACME（Japan Accreditation Council for Medical Education、日本医学教育評価機構）による国際評価であり、現状を調査分析、自ら課題を抽出し、解決へ向けての改革を推し進めるのが目的である。これらの改革の中には、ミッションの再定義やアドミッションポリシー、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシーおよびアセスメントポリシーの策定が含まれ、教育者だけが考える教育プログラムでは不十分であり、教育を受ける側である学生目線の分析も必要とされる。教養教育の選択科目で楽に単位が取れるものに流れるのは、「学生は、サボろうとするもの」と断定するのではなく、教員側が学修の必要性を伝えられてなかったのではないか。学生の学修意欲を刺激するために年次進行に伴う学修内容の積み上げや到達目標、さらに目標を達成したことをチェックする指標であるコンピテンス・コンピテンシー等を示す必要がある。成績や進級の判定に参加することは難しいが、教育プログラムの作成・実施・評価・改善に際して学生の意見を取り入れるために、作成・実施を所掌するカリキュラム専門委員会、評価・改善を所掌する教育プログラム評価委員会に正式な委員として入れることは、学生

は、カウンターパーソンではなく、ステークホルダーであり、ともに医学教育を育てて行く存在であると意識改革が必要である。そもそもヒポクラテス以来、教員は学生をいずれは同じ土俵に登ってくる存在として、医療・医学のチームメイトとなる者として指導してきたのではないか。また、チーム医療では、患者もチームの一員として取り組む存在である。次に求められるのは、患者目線、社会の視点による改革であろう。「お客様は神様です。」とまでへりくだる必要はないし、そういう関係性ではない。ともに同じ方向を向いて進めばよい。この様な流れは、医学の教育だけのものではない。既にイギリスでは、医療事故後の信頼の回復に向けた調査、検証を患者、家族を交えて行っている。

教育の質保証は、すべての分野で国際的な流れである。すでに薬学部薬学科は、JABPE（Japan Accreditation Board for Pharmaceutical Education、薬学教育評価機構）が定める「薬学教育評価」を受審し、歯学部歯学科も受審準備に入っている。これらは、医療系の全ての職種に波及していくと思われる。医療系のみならず、理工学や農学では、JABEE（Japan Accreditation Board for Engineering Education、日本技術者教育認定機構）があり、いずれもプロフェッショナルリズムの一環としての自律向上の具現化である。

徳島医学会報告

第257回徳島医学会学術集会（平成30年度夏期）

予防環境栄養学分野 教授 高橋 章
呼吸器・膠原病内科学分野 教授 西岡 安彦

第257回徳島医学会学術集会は、平成30年8月5日(日)に徳島県医師会館で開催された。今回の大学側の担当は、予防環境栄養学分野：高橋章教授と呼吸器・膠原病内科学分野：西岡安彦教授が務めた。参加者は161名（一般10名を含む）であった。

高橋教授の開会挨拶に続いて、第1会場（ホール）にて3名の教授就任記念講演が行われた。最初に、食品機能学分野：河合慶親教授による「ポリフェノール研究のこれから：体内動態の理解から機能性発現メカニズムの解明へ」、次に、微生物病原学分野：野間口雅子教授による「HIV-1の生存戦略－変異と適応の視点から－」、最後に、地域消化器・総合内科学分野：佐藤康史特任教授による「消化器疾患に対する新たな治療開発の試み－消化器癌と肝硬変に対する治療を中心に－」の講演が行われた。

引き続き、隣接する第2会場（研修室B・C、学習室）において、総計32演題の一般および若手のポスターセッションを通して研究成果が発表され、質疑・討論が活発に行われた。

午後からは、第1会場において、丹黒章徳島医学会会長と齋藤義郎徳島県医師会会長の挨拶の後、前回に選出された第40回徳島医学会賞および第19回若手奨励賞の授与式が行われた。徳島医学会賞は石澤有紀先生（薬理学分野）と遠藤健次先生（徳島県整形外科医会）に、若手奨励賞は平岡淳一郎先生（徳島大学病院卒後臨床研修センター）と川田知代先生（徳島大学病院卒後臨床研修センター（徳島県立中央病院医学教育センター研修中））に授与された。受賞記念講演として、石澤先生による「動脈硬化性疾患発症に対するケルセチンの効果」、遠藤先生による「ロコモティブシンドロームとメタボリックシンドロームを構成する内科疾患との関連性の検討」の講演が行われた。

公開シンポジウム「アレルギー疾患とどう付き合うか？～診断・治療・予防の最前線～」では、5名のシンポジストによる講演が行われた。平成26年に公布されたアレルギー対策基本法に関して、中村陽一先生（横浜市立みなと赤十字病院 アレルギーセンター長）による「期待されるアレルギー専門医とは」の講演を始めとし、國澤純先生（医薬基盤・健康・栄養研究所 ワクチンマテリアルプロジェクト 兼 腸内環境システムプロジェクト プロジェクトリーダー）による「食と腸内細菌から考える腸とアレルギーの密接な関係」、北村嘉章先生（耳鼻咽喉科学分野 講師）による「アレルギー性鼻炎の最新治療・舌下免疫療法」、杉本真弓先生（徳島大学病院小児科 講師）による「こどもの食物アレルギー：食べて防ぐ、食べて治す」、吾妻雅彦先生（医療教育学分野 准教授）による「ぜんそくの治療で大切なこと」の講演が行われた。アレルギーの診療全般にわたる講演で、参加した市民からの質問もあったが、医療関係者にとっても診療に役立つ有意義な講演であった。

最後に、今回のポスターセッションの中から選考された第41回徳島医学会賞と第20回若手奨励賞が、本藤秀樹徳島県医師会常任理事から発表された。徳島医学会賞は天宅あや先生（予防環境栄養学分野）と松本明彦先生（徳島市民病院リハビリテーション科）に、若手奨励賞は宮上侑子先生（徳島大学病院卒後臨床研修センター）と高橋未奈先生（徳島大学病院卒後臨床研修センター）に決定した。その後、西岡教授が閉会挨拶を行い、盛況のうちに閉会した。

本学術集会の開催にあたり、徳島県医師会、徳島医学会事務局、関係スタッフの皆様およびご参加・ご協力いただいた関係の皆様に、心より感謝申し上げます。



◆◆◆ 各賞受賞者 ◆◆◆

第257回徳島医学会学術集会(平成30年8月5日)において、第41回徳島医学会賞及び第20回若手奨励賞の受賞者が選考されました。

第41回徳島医学会賞

天宅 あや（徳島大学大学院医歯薬学研究部予防環境栄養学分野）
「宿主細胞における小胞体ストレス応答は Campylobacter jejuni の細胞内侵入を抑制する」

松本 明彦（徳島市民病院リハビリテーション科）
「消化器がん患者における入院時の栄養指標が退院時の Barthel Index に及ぼす影響について」

第20回若手奨励賞

宮上 侑子（徳島大学病院卒後臨床研修センター）
「不明熱と著明な高CRP血症を呈したCD20陰性びまん性大細胞型B細胞リンパ腫の1例」

高橋 未奈（徳島大学病院卒後臨床研修センター）
「大動脈弁人工弁(機械弁)置換術後遠隔期に生じたOMI-VT storm に対し経心房中隔的に施行したカテーテルアブレーションが著効した1例」

平成30年度 臨床実習後OSCE成績優秀者

平成30年6月30日、臨床実習クリニカルクラークシップの総仕上げとして、6年生を対象とした臨床実習後OSCEを実施しました。成績が特に優秀であった学生には、丹黒医学部長より表彰状が授与されました。このような臨床技能試験を通して、臨床能力の向上が期待されます。

最優秀賞 松木 透馬

優秀賞 貴志 亮太、林 千恵、小玉 美幸、井上 舞、難波 晃平、田中 真波、
河口あゆみ、清水 一磨、富永 千晶

部門賞 阿部 拓馬、岩川 陽介、吉原美沙子、原 諒輔



第70回西日本医科学生総合体育大会 柔道部(団体戦)優勝

蔵本柔道部主将 医学科5年 仁 紙 泰 志

8月5日(日)、いしかわ総合スポーツセンター(石川県金沢市)で開催された第70回西日本医科学生総合体育大会の柔道男子団体戦において、徳島大学蔵本柔道部が優勝しました。

本学柔道部は予選リーグで金沢医大を4-1、福岡大を4-1で下し、決勝トーナメントへと進みました。決勝トーナメントでは、兵庫医大、山口大をそれぞれ4-0、4-1で下し、勝負所であった準決勝の和歌山医大戦、決勝の金沢大戦には本吉司、仁紙祐人、仁紙泰志、加島高之、阿部祐也が出場し、いずれも3-1で勝利しました。

今回の優勝は日頃から熱心にご指導くださる永廣先生、清水先生またOBの方々や応援して下さる皆様のおかげです。これからも部員一同精進してまいりますので応援のほどよろしくお祈りします。



医学部行事予定 (平成30年10月～平成31年3月)

平成30年
 10月1日(月) 後期授業開始
 10月10日(水) 解剖体慰霊祭
 10月27日(土)～10月28日(日) 大学祭(蔵本祭)
 11月1日(木) 第113回医師国家試験願書受付(11月30日(金)まで)
 試験日: 2月9日(土)～2月10日(日)
 11月2日(金) 徳島大学開学記念日
 11月16日(金) 第102回助産師国家試験願書受付(12月7日(金)まで)
 試験日: 2月14日(土)
 第105回保健師国家試験願書受付(12月7日(金)まで)
 試験日: 2月15日(金)
 第108回看護師国家試験願書受付(12月7日(金)まで)
 試験日: 2月17日(日)
 11月23日(金) 入学試験(AO)
 11月23日(金)～24日(土) 入学試験(推薦I)
 12月3日(月) 第33回管理栄養士国家試験願書受付(12月14日(金))
 試験日: 3月3日(日)
 12月14日(金) 第71回診療放射線技師国家試験願書受付(1月4日(金)まで)
 試験日: 2月21日(土)
 第65回臨床検査技師国家試験願書受付(1月4日(金)まで)
 試験日: 2月20日(水)
 12月25日(火)～1月6日(日) 冬季休業

平成31年
 1月19日(土)～20日(日) 大学入試センター試験
 2月10日(日) 入学試験(推薦II)
 2月25日(月)～2月26日(火) 入学試験(前期日程)
 3月12日(火) 入学試験(後期日程)
 3月18日(月) 医師国家試験合格発表
 3月22日(金) 卒業式・大学院修了式
 3月22日(金) 助産師、保健師及び看護師各国家試験合格発表
 3月25日(月)～3月31日(日) 学年末休業
 3月25日(月) 診療放射線技師及び臨床検査技師国家試験合格発表
 3月29日(金) 管理栄養士国家試験合格発表



学遊抄

ボルチモア遊学記

産科婦人科学分野 教授 青原 稔

阪神淡路大震災や地下鉄サリン事件が起こった1995年（平成7年）は、永く日本人の記憶に残る年であるが、8月から米国留学した私にも印象深い年になった。

留学先は東部メリーランド州ボルチモア市（写真1）にあるメリーランド大学医学部産科婦人科学教室で、指導者は若干50歳だがすでに生殖内分泌学の世界的研究者として有名な産婦人科医である E.Y.Adashi 教授（写真2）であった。

留学期間は1年と短かったが、臨床を離れて研究に集中でき、その後の私の大学生活に大きな影響を及ぼした。研究に対する考え方、学会発表の仕方など、一から教えてくれた。英語が不十分な私を毎週日曜に自宅に呼び、研究進具合をチェックしてくれた。そのおかげか、その1年で4本の論文を書くことが

できた（写真3）のは懐かしい思いである。

単身赴任であり、ニューヨークやワシントンが至近距離であったので、休日はよく車を駆って美術館や博物館を回った。米国東部のその年の冬は、車が埋まるほど雪が多く寒かった。それ故、4月になり景色が一斉に緑になった時は本当に生き返った気持ちでした。いずれにしても自由な米国の生活がとても気に入ってしまった。

留学前は短期間ゆえ不安と億劫な気持ちが強かったが、世界中に研究室仲間ができ、四半世紀過ぎた今でも心に残る留学生活であった。



（写真1）ボルチモア市インナーハーバー



（写真2）Adashi 教授とともに



（写真3）研究室からもらったもの

学遊抄

世界で1つの大学を目指して

臨床神経科学分野 教授 梶 龍 児

2000年の春頃のことでした。当時の大西医学部長がわざわざ、私が在職していた京都大学までお越しになって、そのころ徳島大学にあった「難聴診療部」の定員を使って四国で初めての神経内科専門の教室を作りたい、とのお話をされました。そして私が推薦され、教授選を経て同年の11月16日付けで徳島に赴任してまいりました。もともと米国で臨床医をしていたこともあり、米国に帰ることも考えていたものですから少々迷いました。着任早々、大西医学部長にご挨拶に行ったときに、当時難聴診療部であった外来の看板を神経内科に代えていかとお聞きしたところ、ダメというお返事でした。仕事は暇で、外来患者も少なく、最初の患者は「難聴」が主訴ですぐに耳鼻科の武田教授に紹介させていただいたのをよく覚えています。正式な講座化ができたのは2003年ごろだったと思いますが、最初は年間5-6人が入局をしてくれて教室の体裁が整いました。

そのころから、国際学会からのお誘いがあり、国際臨床神経生理学会（IFCN）や国際運動障害学会（MDS）、世界神経学会（WFN）などの理事や役員を務めさせていただきながら、海外からの留学生も増えてきました。研究面では新しいジストニアや筋萎縮性側索硬化症（ALS）の遺伝子を見つけ、業績も上げることができました。また創薬として、ALSの治療薬や次世代ボツリヌス毒素製剤の開発にも関わらせていただきました。



徳島の素晴らしい点は、きわめてワーク・ライフバランスがとりやすい点です。趣味で以前から琵琶湖でやっていたヨットも徳島のケンチョピアでは格安で置いてもらえることになり、この20数年ずっと続けることができました。また、他の教室の先生方とも合同カンファランスなどを持つ等、交流がしやすく大変勉強になりました。

徳島は人口減少・過疎化が進んでいますが、海外ではたとえ人口が少なくともドイツのハイデルベルグ大学などキラリと光る大学が数多くあります。本学が四国の5国立大学の1つではなく、世界に誇れるユニークな大学として発展されることを祈念しております。

学遊抄

がん看護のプロフェッショナル育成に関わって

ストレス緩和ケア看護学分野 教授 雄 西 智恵美

私が看護の仕事に就いたころは、がん患者に対して病名告知はタブーの時代でした。試験開腹におわり、そのまま外科病棟の一室で最期を迎える患者や、真実を伝えられない状況に心を閉ざした患者との関わりが、がん看護への関心に繋がったように思います。1990年代にインフォームド・コンセントの概念が日本に入ってきたころから、告知の是非から事実をどう伝えるか、が検討される時代になりましたが、がん告知やがん治療の危機を克服するには大きなエネルギーが必要であり、「変えることのできない事実に対処し、自分の日常生活を立て直す力をどう支援するか」が私のがん看護の関心テーマとなりました。平成18年に大学院保健科学教育部（修士）が設置され、がん看護の研究や教育に取り組んできましたが、同じころに始まった

「がんプロフェッショナル養成プラン（がんプロ）」として、「がん看護専門看護師」の育成をスタートさせることができ、現在までに8名ががん看護専門看護師の認定を受けて県内外で活躍しています。

今日まで、がん看護専門看護師をめざす院生達やその後の専門看護師としての活動を見てきましたが、彼女たちの高度な知識・技術はもちろん、患者や家族に対する真摯で寛容性のあるケア姿勢や、他職種や周囲のスタッフとの協働・連携する努力を惜しまない姿勢は、確実に臨床の質を変える力になっています。がん診療連携拠点病院の要件に「がん看護専門看護師」の存在が加わる時代も近いと感じています。



リンパ浮腫ケア演習



定例 CNS 事例検討会

学遊抄

学生の頃

医用画像解析学分野 教授 上 野 淳 二

昭和47年徳島大学に入学し、最初の2年間は常三島で一般教養の授業ばかりでした。興味を持つ科目は少なく、授業には出席していたものの、部活とアルバイトが生活の中で大きな比重を占めていました。1年時の夏休みには前半でアルバイト貯金し、後半に工学部の友人と二人で18日間程の北海道旅行をしました。北海道の鉄道周遊券を買い、宿は予め決めずに寝袋を持って出かけました。駅の改札や北大構内のベンチで寝たこともありましたが、若かったせいか、あまり不安を感じていませんでした。当時は北海道に同じような旅行者が多くみられ、カーキ色の大きなリュックを背負っていてカニ族と呼ばれていました。後の年代にはオートバイでツーリングするミツパチ族（ハチ族）なるものも現れました。私も学生時代はジャズとオートバイが好きで、北海道へのツーリングを夢見ましたが、叶いませんでした。それでも、徳島や四国は他地域のモーターサイクリストから見ると憧れの地で、ツーリング先に事欠くことはありませんでした。ジャズはジャズ喫茶で覚えました。曲を覚える為に客のあまりいない時間帯に出向いて、店のマスターにボーカルの入った曲を中心にかけてもらいました。歌詞があると曲を覚



ツーリングコース国道55号線沿い甲浦の白浜海岸（高知県東洋町）

えやすいとマスターにアドバイスされたからです。コーヒー1杯で長時間過ごしたものです。教養時代に一番勉強したのはこれだったのかもしれませんが。この頃の色々な経験が今の生活にも大きな影響を及ぼしていると感じることも多く、貴重な時間を与えられたことに感謝しています。

1 2 3 数字で見る医学部 7 8 9

◆ 入学試験（医学・栄養・保健）

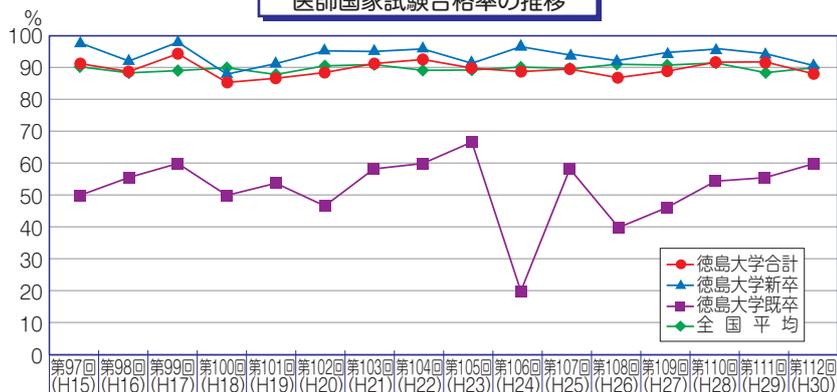
平成30年度 徳島大学医学部入学試験受験者・合格者数・入学者数調

	定員	志願者	受験者	合格者数	入学者数	男	女	県内	県外	その他	現役	一浪	その他	
医 学 科	114	307	244	※ 115	114	65	49	35	79	0	60	35	19	
医 科 栄 養 学 科	50	141	102	52	50	5	46	12	38	0	39	10	1	
保 健 学 科	看 護	70	250	163	74	72	2	70	32	40	0	60	10	2
	放 射	37	178	121	42	37	24	13	6	31	0	31	5	1
	検 査	17	72	65	19	18	9	9	6	12	0	14	3	1

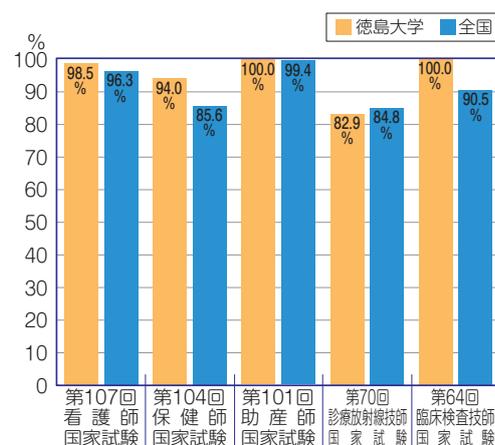
※入学辞退者1名があったため追加合格者1名を出したことにより、合格者が115名となった。

◆ 国家試験

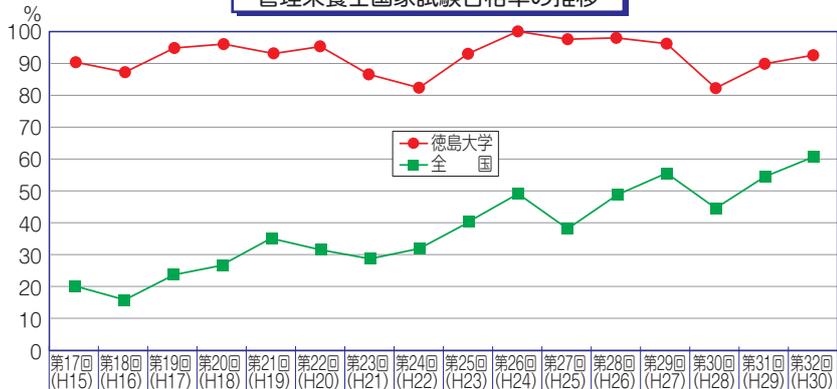
医師国家試験合格率の推移



保健学科 各種国家試験合格状況について



管理栄養士国家試験合格率の推移



◆ 科研費採択状況（医学部・病院の合計）

(平成30年7月1日現在)

研究種目名	平成25年度		平成26年度		平成27年度		平成28年度		平成29年度		平成30年度	
	件数	金額(千円)										
特定領域研究	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
基盤研究 (A)	0	0	1	8,200	1	11,700	1	11,700	1	5,500	1	10,400
基盤研究 (B)	16	68,200	19	74,600	16	65,000	19	68,700	13	41,600	12	49,200
基盤研究 (C)	96	113,100	92	111,700	97	120,400	103	125,600	106	117,000	35	46,200
挑戦的萌芽研究	22	27,800	16	21,200	17	22,600	21	25,500	10	11,800	0	0
挑戦的研究 (開拓)									0	0	0	0
挑戦的研究 (萌芽)									2	4,800	0	0
若手研究 (S)												
若手研究 (A)	1	5,400	3	20,300	3	14,700	4	31,600	4	16,300	4	17,300
若手研究 (B)	56	79,500	44	57,500	53	74,400	57	73,800	50	68,500	27	38,600
研究活動スタート支援	7	7,700	7	7,500	8	8,600	6	6,800	2	2,100	1	1,000
新学術領域研究	5	19,500	4	14,200	1	10,900	2	14,900	3	25,800	3	25,500
特別研究促進費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
特別研究員奨励費	2	1,800	2	1,900	2	1,700	4	3,400	3	2,500	6	4,800
国際共同研究強化					2	22,400	1	11,200	0	0	0	0
合 計	205	323,000	188	317,100	200	352,400	218	373,200	193	294,800	89	193,000

※若手研究 (S)については、平成22年度より新規募集は行われていない。
 ※国際共同研究強化については、平成27年度からの新規種目。
 ※挑戦的研究 (開拓)及び挑戦的研究 (萌芽)については、平成29年度からの新規種目。

新任教職員ご挨拶

蔵本事務部長 米崎正則



平成30年4月1日付けで、蔵本事務部医学部総務課長から蔵本事務部長に異動となりました。今回の「医学部だより」をお借りしまして謹んでご挨拶を申し上げます。

私たち蔵本事務部の事務職員は医学部長のもと医学部各学科の管理運営業務に従事し、教職員の皆様の教育・研究活動並びに学生サービスに対する支援

業務を担当しています。

第3期中期目標・中期計画期間中における大学を取り巻く環境は、財政面をはじめとして年々厳しい状況になっていますが、伝統のある医学部の更なる発展のため蔵本事務部が一丸となって精一杯努力したいと考えていますので、どうぞよろしく願いたします。

退職者ご挨拶



平成4年に徳島大学に赴任し、栄養学科で11年、医学科で15年お世話になりました。赴任当時の蔵本キャンパスの建物はこの26年で一新されました。大学組織も、部局化と法人化を経てめまぐるしく変貌しました。「ヒトをはぐくみ育てる」大学から「地域とともに生き残りをかける」大学へと変わった結果、足元も遠くも見ず、ひたすら目の前のことしか

病態生理学分野 教授 六反一仁

見ない大学に変わっていったように思います。優れた研究論文を残すこと、優れた人材を育てること、この二つ以外に記憶に残る教員にはなれません。私はどちらも出来ませんでした。皆様のお力で、若いヒトが集まり切磋琢磨して人材を育てる大学の姿を取り戻して頂くことを祈願し、退任の挨拶とさせていただきます。



このたび、医歯薬研究部臨床神経科学分野教授を辞して、京都にある国立病院機構宇多野病院の院長職を10月1日付で拝命することになりました。2000年の11月16日から約18年の長きにわたり、皆様方には大変お世話になりました。AMEDの医師主導治験や他の創薬のプロジェクトは研究費とともに大学

臨床神経科学分野 教授 梶 龍 児

に残していく予定ですので、皆様方にはできるだけご迷惑が掛からないようにと思っております。そのため名前だけは非常勤の教授として残りますが、ときどき戻ってきますのでその折にはまたお声がけください。



徳島大学は、学校教育法第109条第2項の規定による「大学機関別認証評価」を受け、「大学評価基準を満たしている」と認定されました。
(平成26年3月26日)

- 認定評価機関
独立行政法人大学評価・学位授与機構
- 認証期間 7年間
(平成26年4月1日～平成33年3月31日)

編集後記



今年の夏は記録的な猛暑であった。そんな中でも、運動部の学生達は練習や稽古に励み、阿波踊りの学生連の奏でる音楽が校舎に響く。短期留学に出かける学生や、研究に没頭する学生、学会が主催するサマーキャンプ等で活躍する学生もいる。本号では第70回を迎えた西日本医科学生総合体育大会の結果が報告されている。勝ってもよし、負けてもよし、暑い夏に目標を掲げて仲間と努力を重ねた日々は、きっと大きな財産となるに違いない。夏の甲子園では連日熱戦が続き、試合を重ねるごとに強くなるチームがいくつも出てきて感動を呼んだ。夏は若者を大きく成長させてくれる季節だと思ってしまう。いつしか肌寒い空気となり、虫の音も響き出した。どんなに暑くても季節は巡る。この秋を「成熟の季節」にしていきたいと切に願う。
(常山幸一)

発行 徳島大学医学部 編集 医学部広報委員会
広報委員 常山幸一(委員長)、勢井宏義、高山哲治、廣瀬 隼、濱田康弘、岸田佐智、米崎正則

本誌へのご意見・ご要望は、(総務係)E-mail: isysoumu1k@tokushima-u.ac.jp までお願いします。
なお、写真は執筆者各位の提供により掲載しています。

Tel: 088-633-9116 Fax: 088-633-9028 URL <http://www.tokushima-u.ac.jp/med/>